宮園遺跡現地公開資料

平成 28 年 12 月 10 日（土曜日）
大阪府教育庁文化財保護課

■はじめに

堺市に所在する宮園遺跡は、泉北丘陵上の緩い傾斜地に立地しています。東西 800 m、南北 430 mの範囲が遺跡とされており（図１）、中世（鎌倉～室町時代／おおよそ 12 世紀～ 16 世紀）を中心とする時期の遺跡と考えられています。宮園遺跡の周辺には、主要な遺跡として、北に深井清水町遺跡（古墳時代～中世）、東に深井幡池遺跡（古墳時代・奈良時代）、南に平井遺跡（旧石器時代～中世）などがあり、このうち深井幡池遺跡で８世紀の土師器と５世紀後半の須恵器を焼成した遺構が見つかっていることがとくに注目されます。

今回の発掘調査は、府営八田荘住宅の建替えに伴って実施しています。その成果として、中世を中心とする時期の遺構・遺物や、いまは埋没した谷が見つかっています。現在の地表面からはわからない、かつての地形やむかしの暮らしのようすがわかるという意味で、重要な成果を得ることができました。

■発見された遺構

発見された遺構の中で多いのは、土壙と溝、そして水田の畦畔（あぜ）で、その他にかつてこの場所に自然の谷があったこともわかりました。谷の最下部には砂、その上部には泥が溜まっており、徐々に水の流れがなくなっていくようすがわかります。その後、この谷は埋め立てられ、中世後期（14 ～ 15 世紀）には調査地の全域が水田として利用されていました。この時期の遺構として、水田の畦畔などを検出しています。また、水田耕作を営むかたわらで、土採りを目的とすると考えられる土壙も多く掘られています。この土採りは粘土を対象としていることから、周辺で焼物の生産が行われていたのかもしれません。調査区一帯が水田として利用される景観は、その後、1960 年代に八田荘住宅が建設されるまで続くこととなります。

図１　宮園遺跡の位置と周辺の遺跡

写真１　石鏃（縄文時代）
長さ 2.5cm

写真２　須恵器ハソウ
（古墳時代後期／６世紀頃）

写真３　須恵器・瓦器・瓦質土器
（中世後期／１４～１５世紀頃）

■出土した遺物

今回の調査で見つかったなかでもっとも古い遺物は、縄文時代のサヌカイト製石鏃（写真１）や剥片（石を割り取る際に生じた破片）などです。新しい時代の土に紛れ込んだものではありますが、調査地の周辺で、このころからすでに人々の暮らしが営まれていたことがわかります。

弥生時代を挟んで古墳時代（３世紀後半～６世紀）になると、再び遺物が認められるようになります。谷の中に溜まった泥からは古墳時代の須恵器（写真２）が出土しているほか、新しい時代の土器に混じって須恵器窯のものと思われる窯の破片が出土しており、調査地の周辺で窯業が営まれていた物証として注目されます。

その後、古代（７～ 11 世紀）の土器は少なく、周辺での活動は低調なようです。ただ中世になると状況は一変し、多くの土器が出土しています。これらの多くは、普段使いの土器である瓦器椀や、煮炊きや料理に用いる瓦質土器の羽釜・擂鉢といった生活に密着した土器ですが（写真３）、破片資料ながら当時高級品だった中国産の磁器もあります。また、ごく少量ですが瓦も出土しており、周辺に寺院が存在したことを窺わせる資料として注目できます。

■まとめ

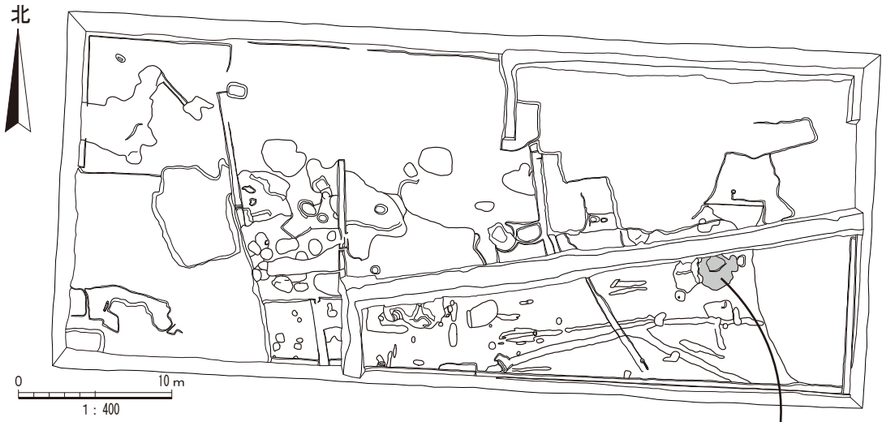
今回の調査によって、宮園遺跡にはいまは埋没した谷があり、この谷は６世紀頃にはほとんど水流がなくなっていたこと、その後、14 ～ 15 世紀頃になると大規模に開発され、一帯が水田化されたこと、また水田耕作を行う傍らで粘土の採取が行われたいたことなどが明らかになりました。地域の歴史を明らかにするうえで、地上からはわからないこうした知見を得ることができたことは、貴重な成果といえるでしょう。

【１区西半の遺構】

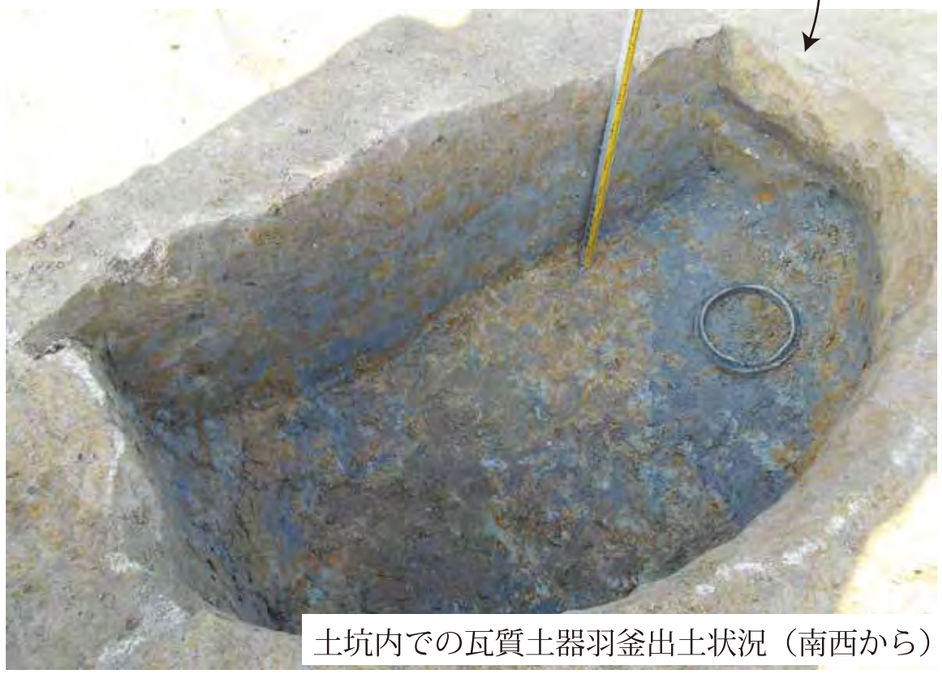
１区の土坑群（北西から）

１区で検出した谷（南東から）

【 調査区の配置と谷 】



【２区の遺構（※２区は既に埋め戻しています）】



土坑内での瓦質土器羽釜出土状況（南西から）

２区全景（北西から）